

あの時代の煌めきが蘇る！
サクソで奏でる
昭和歌謡♪

／帰ってきた／

アルト&テナーサクソで吹く お父さんが泣いてよろこぶ 昭和歌謡曲集



著者・奏者 「岡田卓也氏」 インタビュー

この度発売された曲集「／帰ってきた！／アルト&テナーサクソで吹く お父さんが泣いてよろこぶ 昭和歌謡曲集 [シーズン2]」の監修者で、付属CDで全曲演奏を披露してくれている岡田卓也氏。

氏がYouTubeでUpした昭和歌謡や演歌のサクソ演奏のファンは多く、合計視聴回数は950万回を超えるほどの人気を誇る。そんな岡田氏が昭和歌謡、演歌を演奏してきたこれまでの歩みや、サクソの演奏で心掛けるポイントなど語ってもらった。

——サクソとの出会いについて教えてください。

岡田 最初は高校のブラスバンドでサクソを始めたんですが、それと同時に、うちのお袋の友人に、高校の先生で、サクソを吹いている方がいたんです。それで「お前も上手くなりたかったら、その先生に教わったら」ということで、その先生に習い始めたんですが、その方がとんでもなく変わった方で、「明日からサクソを教えてあげるから、夕方5時になったら、ネクタイ締めて家来なさい」というわけです。この先生は、そういう礼儀に厳しい先生かなと思って……。当時ネクタイなんて持ってなかったので、慌てて友だちに借りて、ネクタイを締めてその先生の家に行ったんですよ。

そしたらいきなり「車に乗りなさい」と言われて。当時、学校の先生で乗用車を持っている人なんて、そうそういなかったですよ。それで伊香保温泉のグランドホテルに連れて

行かれたんです。当時は楽器を持っていなかったんですが、「こここのサロンのマスターがサクソを持っているので、それを借りるから、ここで練習しなさい」と言うわけです。まだ高校生だった当時、伊香保温泉のホテルのサロンで、夜8時の営業開始まで、サクソの練習をさせられてね。

その後、サロンの営業開始になって、赤い背広を着させられ、ステージと一緒に乗れと、そして一緒にサクソを吹けと言うんです。もちろん吹ける訳ないですよ（笑）。だって、習いに行ったその日ですから（笑）。それは当時の業界で言うところの「立ちんぼ」というやつで、楽器さえ持ってステージに立ってれば、それだけでバンドメンバーとしてカウントされギャラがもらえるという仕組みです。要するにその先生はホテルと契約してたんですよ。昼間は学校で教壇に立ち、夜になると自分の教え子を集めて伊香保温泉に連れて行き、いっしょに吹かせ、ホテル

からギャラをもらってたわけ。早い話が悪いことしてたんですよ（笑）。

それに私もまんまとハマって……。笑）。しかし、確かにその先生はサクソも教えてくれたし、しかもすぐ楽器の上手い人だったんです。その先生に教わったから、私の今の演奏につながっているんです。

——サロンの営業開始までは、しっかりとサクソのレッスンを受けてたんですね。

岡田 サロンの営業が始まるまでは、ほとんど一人で吹いてましたね。アドバイスといえは「本番で隣に座って僕の音を聴いてれば、君は上手くなるから」そんなふうで、結局、その先生がホテルとどんな契約をしてたか詳しくはわからないけど、キャバレーなんかと一緒に、バンドメンバーを4人以上揃えないと契約違反になっちゃうんですよ。

先生は高校でブラスバンドを教えていて、その高校の教え子で、トランペットとドラムが

2人、それに高校は先生とは別だったけど自分も含めて3人の弟子、あとはバンマスの先生とベースがいて、5人編成のバンドで毎晩演奏していました。

はじめは全然吹けなくて、楽器持ってくるだけでしたが、3ヶ月もすると、2、3曲吹けるようになって。その頃になると先生に教わりながら、ギャラもしっかりもらってました。そのうち曲中でソロなんかが回ってくるようになり、「ソロのときは立って吹きなさい」と。しょうがないから立って吹いてたんですが、9時になるとショーが始まるんです。なにかというとストリップショーで、そのショーの時は踊り子さんに合わせて伴奏をしなくてはならないんですが、サクスのソロで立ち上がり吹いている時に、踊り子さんが俺の前に来て、こっちを向いて、纏ってる布を広げて面白がって裸を見せるんですよ。高校生からすると目のやり場に困り、お客からは「汚ねーぞ、バンドに見せずにこっちに見せる！」とヤジが飛んだりして。そんな時代でしたね。



—— 波乱に富んだ高校時代の音楽活動ですね。その後はどのような演奏活動を？

岡田 そんなことをやってるうちに高校卒業になり、同じバンドで先生の弟子のドラムとトランペットと自分の3人で「高校卒業したらどうする？」という話になって、「じゃあ、近くの大学に通いながら、夜はバンドをやる」と、そうすれば親から金をもらわずにギャラだけで学校に行けるよと、それでサロンでの演奏は続けたんだけど、その頃には自分で言うのもなんですが、かなり上手になっていました。その頃の先生の教えとして、まずは初見が取れること。楽譜がしっかり読めて、ソロで演奏する時は最もらしい音で、お客が納得する演奏をしないとダメだと。あの頃はジャズをやりたくてしょうがなかったんですよ。しかし、お客さんの多くは高齢者のおじいちゃん、おばあちゃん、



戦時歌謡とか、リンゴ追分とか、そういった曲が喜ばれるんですね。お客に喜んでもらうためにはこうやって吹くんだよと、お年寄りの前で『船頭小唄』などを先生がサクスで吹く。するとお年寄りが涙ぐんでいるんです。サクスの音色に感動してるんですね。そういう人に感動を与えられるサクスでなければ、外国のブルースなどを上手く吹ける訳ないんだよと、「日本人を感動させる歌謡曲が吹けないうちにジャズを演奏したって、人は喜んでくれないし、一人前にはなれない」そう言われたんです。まずは日本人の心を掴んでからジャズをかじりなさいと教わりましたね。

そんな先生からの仕込みもあり、さらにサクスが上手くなってた大学2年の頃、渋谷にあるキャバレーのマネージャーが、いまやってるサロンの倍以上のギャラ4万円（※1ヶ月分。当時のサラリーマンの給料は3万円くらい）を出すからウチに来てと、引き抜きに来たんです。そうすると行かないわけにはいかず、そのキャバレーに移ったんです。そこではどさ回りや、淡谷のリ子なんかの有名な歌手も来て歌謡ショーを行ったり、踊り子さんのパッケージショーとあって、踊りに合わせて演奏するんだけど、そのとき勤進帳というとても長い楽譜を渡され、テンポの確認だけしてすぐに本番。それをこなせないとまともなギャラはもらえない。

あとは、当時よくリクエストされたのが、『ハーレム・ノクターン』と『ダーニー・ボーイ』この2曲は必須のレパートリーでしたね。

—— ファンキーな先生だけど、教え方は素敵ですね。

岡田 いま考えると、たしかにその通りだと思いますね。その先生の教えが今も自分の中で生きています。

—— 現在、多岐にわたる演奏活動の他、後進の指導も精力的に行なわれていますが、歌謡曲、演歌を演奏する上での表現や奏法など重要なポイントについて、レッスンのとき生徒さんにするアドバイスはどんな内容でしょうか？

岡田 奏法は要するに表現のうちですよ。例えばここは「カッコよく吹いたほうがいいかな」、「泣かしたほうがいいかな」というように、抑揚をつけて演奏することです。歌の曲をサクスで演奏する際に、その曲の歌詞を見るんです。歌詞とメロディのフレーズを照らし合わせることで、どういうふうに吹けばいいのかイメージが浮かぶでしょう。そのイメージをしっかり膨らませて演奏することが大事です。それと、その歌をうたっているプロの歌手の演奏を聴く。石川さゆりはここをこういうふうに表示しているとか、坂本冬美はこういうふう歌っているとか、それをサクスでも歌をうたっているように表現することを心がけるのが大事だと思います。

—— ありがとうございます。

岡田卓也氏 使用楽器

<A.sax>
フランス セルマー Mark VI
マウスピース:メイヤー 5番
リード:レジェール シグネチャー

<T.sax>
フランス セルマー Mark VI GP
マウスピース:デュコフ7番
リード:レジェール シグネチャー

